

令和三年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

佳作

助け合う社会

別府市立朝日中学校二年 大平 修斗

僕の母には小さいころから聴覚障がいがあります。まったく聞こえないわけではなく、補聴器をかけていけば近くの人は会話ができます。しかし昨年からコロナウイルスが流行し皆がマスクをつけているので、唇の動きを読みとることができず、

「何を言っているのかわからない。」

と、母が話しているのを何度か聞いたことがあります。買い物や、病院に行ったときに聞きとれない母の代わりに、僕が聞いたり答えたりすることも多くなりました。それでふと僕は、「母はこんなに不便な思いをしているのに、どうやって仕事をしているのだろう。」と思いました。

今、母は放課後児童クラブで働いていますが、ここで働くまでは、もう外に出て仕事をすることをあきらめていたそうです。理由は人の話を聞きとれないので、それを理由に断られたり、働いても聞きまちがいで迷惑をかけたりするからです。でも今の職場は、

「できることをしてくれたら良い。」

と言ってくれて、困ったときは周りの人が助けてくれるそうです。それに、児童クラブの子どもたちの中には、聞きとりにくい母が口元を読みとれるように、マスクをずらして口元を見せて話してくれたり、伝えたいことを手や紙に書いてくれたりしてくれる子どももいるそうです。

「お願いしたわけでもないのに、それが自然にできるってすごいよね。」

と母は言っていました。そういった環境で仕事ができているので、母はできないことも多いけれど、自分にできることをがんばろうという気持ちになるそうです。

その話を聞いて、僕は母の耳が悪いことを障がいがあると、特別に意識したことはありませんでした。でも、やはり困っていることやつらい思いをすることもあるんだと気づいたと同時に、一緒に働く人の理解や助けがあつて母は仕事ができているということを知りました。

以前は映像を見ているだけのテレビも、字幕放送によって楽しむことができるようになったし、音声を文字に変換してくれるアプリがでるなど、聴覚障がいのある人を支援する機器も開発され、少しずつ聴覚障がいのある人にもやさしい社会になってきていると思います。

ですがいちばん大事な人は人を思いやる気持ちだと思います。相手に関心を持ち、何に困っているのか、自分に何ができるのか、と考えることができたなら自然と手助けができるのではないでしようか。

障がいの種類は様々だし、目に見える障がいもあれば、目に見えない障がいをかかえている人もいると思いますが、どんな人でもほんの少しの手助けがあれば、仕事ができ、やりたいことをあきらめずにすむのではないかと思います。

この夏休み、オリンピックに続いて、パラリンピックが開催されました。口で矢を放つアーチェリーの選手や、両腕がなく脚だけで泳ぐ競泳の選手、視覚障がいのある陸上選手など、様々な選手があきらめずに挑戦する姿に感動しました。また、ほとんどの競技で、その選手たちをサポートする人たちが沢山いることにも気づきました。その人たちがいてこそ、選手が挑戦できる、それは社会の中でも同じなのではないと思います。

僕が社会にできるのはまだ先ですが、障がいのある人もない人も助け合いながら一緒に働ける社会であつてほしいと思います。そして、まずは、身近な人に思いやりを持って生活していきたいと思います。